

インターネット技術の先端展示

Interop[®]21

放送システムへのインパクトを 3人の専門家に聞く

- ① ShowNetシステムをデザインするNOCリーダー・遠峰隆史氏（情報通信研究機構）
「放送関係者に気づいてほしいポイント」
- ② 時刻同期PTP技術を提供するセイコーソリューションズ・長谷川幹人氏
「同期技術PTPがもたらすIPの実行力」とは何か
- ③ 米欧の次世代放送規格に詳しいブロードメディア・園田公一氏
「米欧の次世代放送サービスはIP化が前提」で狙うビジョン



ShowNetの展示技術を聞くツアー

5年以上も前の2015年、ヨーロッパ最大の放送機器展であるIBCの会場に衝撃的なメッセージがあった——「SDI is dead」。「SDI」(Serial Digital Interface)とは、業務用映像機器で使われる非圧縮のデジタル映像信号とデジタル音声信号を1本の同軸ケーブルで送る規格で、放送局内の機器を結ぶ標準フォーマットのことだ。

翌2016年には「SDI MUST DIE」、「HARDWARE IS DEAD」となり、「SDI over IP」、「Media over IP」の規格提案が大きく取り上げられた。本誌はいち早く注目し、2016年12月に『IPライブ伝送制作システムの解説書』を発行し、現在シリーズ3を販売している。「SDIからIPへ」という変化は戸惑いを与えつつだが、IP化できる要因が分かるにつれ信頼を得てきた。まず、伝送スピードで、10Gbpsの伝送レートをSDIは2014年に達成したが、IPは2002年には一般的という差がある。さらに、放送用ビデオ、オーディオ、アンシラリー（補助データ）などのライブシステムがIP化されたことで、ファイルベース運用の編集や送出とつながり、IPで局内を統合できる展望が見えてきた。柔軟性のあるソフトウェアベースのシステム構築は、今後多様化する視聴者のデバイス環境や要望に対応しやすく、新しいビジネスチャンスの基盤となる。まさに「HARDWARE IS DEAD」だ。

個々の機材をSDIで連携する放送技術の考えから、IP化にどう向き合うのか、が放送関係者に突きつけられた。IP機器は通信の大きな市場を背景にコモディティ化でコストメリットというメリットを生かすチャンスに恵まれた。ならば、インターネット技術の最先端を知ろう、という単純な発想で未来のネットワークコンセプトを展示するイベント「Interop」（4月14日～16日/幕張メッセ）に、放送の次世代という視点で関心を持った。Interopの中でも、特に「ShowNet」コーナーが見どころだ。ネットで情報収集することが多い中、「I know it works because I saw it at Interop.」を掲げ、「実際に動いているところが見たい。ここに来ればそれが分かる」というデモ展示は貴重である。

そこでShowNetのインターネット技術と放送技術を関連づける視点を3人の専門家に聞いた。

（企画担当：吉井 勇・本誌編集部）